

## 令和6年度第1回川崎市特別支援教育推進懇談会 会議録（摘録）

- 1 日時 令和7年1月28日（火）午後6時～午後7時45分
- 2 場所 川崎市役所本庁舎1階101会議室
- 3 出席者
  - (1) 委員 関戸委員、笹森委員、池畑委員、横山委員、當間委員、浅野委員、堀委員
  - (2) 川崎市 稲葉中央支援学校校長、松原井田小学校校長、中川日吉中学校校長
  - (3) 事務局 教育委員会事務局学校教育課 支援教育課 森課長、伊藤担当課長、近藤担当課長、鈴木指導主事、松尾指導主事、米岡課長補佐、臼田職員  
総合教育センター特別支援教育センター滝口室長
- 4 議事
  - (1) これまでの取組状況と課題等について（公開）
  - (2) その他（公開）
- 5 傍聴者 なし
- 6 会議内容
  - (1) 次第1 開会
  - (2) 次第2 懇談会について  
（会議進行説明）
  - (3) 次第3 議事
    - ア これまでの取組状況と課題等について  
（森課長）

それでは、次第の3「議事」に移らせていただきます。

はじめに、「(1) これまでの取組状況と課題等について」事務局から御説明させていただきます。

（事務局）  
<事務局から資料の説明>

（森課長）  
ただいまの説明につきまして、御質問等ありましたらお願いします。

（堀委員）  
資料の6ページの就学相談件数は、通級指導教室を含まずに、支援級や支援学校への就学相談の件数という理解でよいでしょうか。

（滝口室長）  
初就相談の件数なので、通常の学級も含めての相談件数です。基本的には、特別支援学校や特別支援学級の就学相談ではありますが、通常の学級でも心配なことがあれば、まずは学校と相談した上で、こちらの就学相談に申し込んでいただくこともできるという流れになっています。

(堀委員)

学校と相談した上で、こちらに相談してくださいと言われる保護者も増えていると思  
ってよいのでしょうか。

(滝口室長)

それも一つありますし、最初は通常の学級を希望しているけれど、学校と相談して、保  
護者自身が心配に思っ、相談に来るという場合もあります。

(関戸委員)

さきほどの説明で児童生徒数が減っているにもかかわらず、小中学校ともに特別支援  
学級に在籍している児童生徒数が増えているという話がありましたが、その要因分析は  
どのようにお考えですか。

(米岡課長補佐)

本市ではまだ児童生徒数が減ってはいないのですが、今後減っていく見込みとなっ  
ています。恐らく、そうなった場合でも、特別支援学級の増え方は国の傾向と同様に増え  
ていくのではないかと考えています。一人ひとり分析ができていくわけではありませ  
んが、保護者の方々が特別支援学級に入ることに抵抗がなくなってきたりとか、情緒障  
害等について、これまではっきり認識されていなかったものが検査等で分かるようにな  
ってきたり、そういった状況が背景にあると考えています。

(笹森委員)

インクルーシブ教育の構築という観点からすると、特別支援学級の人数が増えている  
ことは方向性が逆向きであると考えます。国全体もその傾向があります。川崎市の話は分  
けて考えなければならないと思いますが、次の10年間のビジョンの中でどのようにする  
かは考えないといけないと思います。

通級による指導の説明で、川崎市が一次支援、二次支援の仕組みを動かしてきている  
ことにより、校内で相談支援ができていくというのは、他府県と比べると先駆的な取組だ  
と思います。他府県だと通級による指導につながっているような子どもが、川崎市だと通  
級による指導を受けなくても済んでいるのだとすると、一次支援と二次支援の対象にな  
った子どもの数は確認しておくべきだと思います。

もう一点、自閉・情緒学級の増加も知的と同じように増えていますが、数として確認し  
てほしいのは、特別支援学校や学級から通常の学級に転籍できた子どもの数です。とくに  
自閉・情緒学級では、少人数で安心できる場での指導から始め、学年が上がったら通常  
の学級に転籍して、通常の学級に在籍する子どもの数が増えていくといいと思っています。

(森課長)

次に、「2 これまでの取組状況と課題」について御説明させていただきます。

(事務局)

<事務局から資料の説明>

(関戸委員)

10年ほど前に、横浜市の小中学校の交流籍について調べたことがあって、小学校では比較的保護者の方が交流を望むけれど、中学校に上がると、交流を望む生徒が減るという結果がでました。川崎市においても、3年間で1.8倍に増えたとありますが、小中学校で見ると内訳はどうでしょうか。

(鈴木指導主事)

川崎市では、小学部だけでなく、中学部でも交流籍を望む生徒が多い傾向があります。教育委員会で、居住地校交流連絡会議というのを年3回開いていて、そこには中学校の先生方にも来ていただいているので、交流籍の意義を伝えています。

(笹森委員)

通常の学級に在籍している児童生徒にとっても、支援学校や支援学級に在籍している子どもたちと一緒に学ぶことは、意味があるので、通常の学級の先生方が、お客さんにしないようにしてほしいです。自閉・情緒学級の子どもは、交流及び共同学習により通常の学級でも生活や学習ができるようになるのなら、通常学級に転籍してほしいと思います。

それから、高校の通級による指導はなぜ広まらなかったのでしょうか。

(近藤担当課長)

10年前には高校での支援教育を行うということになじみが薄く、管理職の理解も含めて広がりにくかったと思いますが、最近は管理職をはじめ、現場での支援教育に対するニーズが高まってきていると感じていますので、改めて高校の通級による指導についても検討したいと思っています。

(堀委員)

資料の15ページで、教育相談を充実させたのに、それでも通級指導教室に通う児童生徒が減少してしまったことについて、どのように考えていますか。

(米岡課長補佐)

ここでいう教育相談は未就学児に関する取組でして、通級による指導については通級による指導の課題の中で説明する資料のつくりにしていました。ただ、教育相談と通級による指導の関係という切り口は確かにあろうかと思えますので、今後御意見をいただきながらどういう整理がよいか、検討させていただきます。

(堀委員)

通級指導教室については、別のテーマで振返っていただいているという理解でよいでしょうか。

(米岡課長補佐)

別のスライドで、通級指導教室の入級時の課題を後ほどお話ししたいと思います。また、笹森委員からも御指摘いただきましたが、通級指導教室の児童生徒数が減ったことの要因として一次支援、二次支援によるものかどうかという数字的な根拠もこれから確認させていただきたいと思っています。

(堀委員)

通級指導教室に通いたいけれど、通わせてもらえないという声もあるので、この辺りは課題としてあるのかなと親の会としては思っています。必要な支援が届いているのかということは、検討いただければと思います。

(森課長)

保護者の立場から、當間委員、差し支えなければ御意見をいただければと思うのですが、いかがでしょうか。

(當間委員)

特別支援教育の方針を来年度1年間で考えるということで聞いていたのですが、1年間考えただけで10年先まで見通せるのかという疑問はあります。

10年前に目指した姿が達成できたのかということがよく分かりませんでした。

支援が必要な子どもたちと一括りに言われても、幅があるものだとも思っていて、一次支援、二次支援の話があったが、通常のクラスで対応できるものか、教室の感じ等が分からないです。

インクルーシブにしたいのか、できることとできないこともあると思うので、どういう形を目指しているのか疑問に思いました。

(森課長)

どういう姿を目指すべきか、我々も検討しているところですので、方向性については皆様の意見も聞きながら考えていきたいと思っています。

(関戸委員)

世界で一番インクルーシブ教育が進んでいるのはイタリアだと思っています。1992年に、幼稚園から大学まですべての子どもが障害等を理由に入学を拒否されることはないという法律ができ、法令上では特別支援学校や特別支援学級はなくなりました。ところが2010年くらいから、特に視覚障害のある子どもをもつ保護者の方から、通常の学校では視覚障害のある子どものニーズに合った教育が行われていないという声が上がるとなりました。

インクルーシブ教育で一番大事なのは、個のニーズに応じるということだと考えています。個のニーズに応じるということの一つに、通常の学級で学ぶということもあると思っています。イタリアでは例えば、個のニーズに応じるために、1学級当たりの人数を減らすといった工夫をされてインクルーシブ教育を進めてきています。川崎市がこれからインクルーシブ教育を進めるにあたって、どのようなイメージを持って進めていくかは、興味深い部分もありますので、ぜひとも個のニーズに応じるということは工夫してほしいと強く思っています。

通級指導教室の利用人数が減っていったのは確かに一方の面ではいいことなのかもしれませんが、本当にそれでその子どものニーズに応じられているか、ということは考えないといけません。

特別支援学級に通う子どもの数が増えていて、それに対してどう学校が対応していく

のか、そのあたりも十分に考えていかないと、形だけのインクルーシブ教育になってしまって、本当に子どもたちの社会参加や自立につながる教育に至らないのかなと、そういう懸念もあります。

(森課長)

時間の関係がございますので、次の資料の説明をさせていただきます。

(事務局)

<事務局から資料の説明>

(森課長)

基本方針Ⅱについて御意見をいただけますでしょうか。

(堀委員)

資料の23ページの通級指導教室の併置の検討について優先度が低いということ、親の会でも認識が同じと思っています。

ただ、一方で24ページの、中学校の通級による指導で巡回が必要かどうかアンケートをしたけれども、8割がその必要がないという回答だったから巡回はしていないということが記載されていますが、こちらについては、親の会で、小学校の通級指導教室に通っている保護者へのアンケートをとったところ、中学校も通級指導教室に通いたいという回答自体は多かったです。

中学校の通級指導教室に通いたいけれど通わないと判断した理由は何ですかと聞いたところ、丸一日普段通っていない学校に行くことについて不安だからという声がありました。そういった不安もあって中学校の通級指導教室に通うことを諦めてしまった層もあるので、必ずしも巡回が不要だという結果にはならないのではないかと考えています。

(森課長)

学校現場の御意見をいただければと思うのですが、中川校長いかがでしょうか。

(中川校長)

本校でも、通級による指導を必要としている生徒は多くいますが、一日授業を抜けてしまうとその日の授業のフォローが難しく、そのあたりの選択で通級指導教室をやめてしまうお子さんもいます。また、通級指導教室に行くために教室からいなくなるので、それを人に知られたくないという生徒もおりますので、難しいと感じているところです。

一方で、日本語指導教室は、巡回で非常勤講師の方がきていただいているので、1時間単位で指導を受けて教室に戻ってくるので、これに拒否感のある生徒はいません。周りの子たちも理解しているので、通級指導教室の機能が、学校の中で、短時間でできるようなものに変っていくことがあると、学校現場は使いやすいのかなと感じています。

(笹森委員)

自尊感情の影響が中学生になると大きくなり、周りの子どもに対する意識が高くなるのと、高校進学があるのでそのあたりで中学校の通級による指導の在り方は小学校とは違うところがあると思っています。

小学校の通級による指導は何を学ぶかということがはっきりしていますが、中学校の場合は、本人がそこに行って何を学びたいかということが具体化されないと、行っても意味ないと本人も思ってしまいますので、そのあたりは難しさだと思っています。

(森課長)

次のテーマの御意見をいただければと思います。

(當間委員)

色々な学びの場所があって、連携が必要になると思うのですが、先生方のネットワークはどのように連携しているのでしょうか。

(近藤担当課長)

学校ごとにやり方は違いますが、通級担当者と担任、通級担当者と支援教育コーディネーター、通級指導教室のセンター的機能担当教員とで連携するようにしています。

(當間委員)

個別の支援計画などもそこで共有するのでしょうか。

(近藤担当課長)

通級による指導の場合は、個別の指導計画を三者でつくっていますので、学校と通級指導教室で相談しながら、保護者にも共有していくようにしています。

(當間委員)

それはどの程度の頻度で行っているのでしょうか。

(近藤担当課長)

普段は連絡帳でのやりとりをしています。担当者が伺いながら話すというのは大体年に2回程度です。また、各通級指導教室のセンター的機能担当教員が、別途計画的に訪問し、通級指導教室に通う児童生徒に関する情報交換を行っています。お子さんによっては、さらに緊密な連携が必要なケースもありますので、そのときには頻度を上げることもあります。

(當間委員)

個別の指導計画の作成についての説明のときに、先生方が必要だと思っているけれど、それがつながっていない方もいるというお話だったのですが、色々な学びの場があっても保護者が調べないと見つからないし、分かりにくいなと感じています。

先生から見て、この子は個別の指導計画が必要だと思っても、親が気付いていない場合もあると思うので、必要な支援が届いていない場合があるのかなと思いました。

(近藤担当課長)

個別の指導計画は保護者の同意をもって作るものですので、同意をもらうことには難しさも感じています。

(當間委員)

保護者から同意がもらえないけれど、支援が必要だと思っている子にはどういったケアをしているのか気になりました。

(近藤担当課長)

個別の指導計画そのものは作ってなくても、校内委員会で支援についての情報共有を行い、支援は行っています。

(當間委員)

現場頼みになってしまうように受け取れますが、仕組み化するのは難しいのでしょうか。

(森課長)

学校現場としてはいかがでしょうか。

(松原校長)

本校の話ではありますが、個別の指導計画については必要な子には全部作っています。保護者の中には、学校ではそういう姿を見ているけれど、御家庭ではそういう姿が見えないから、これは違うのではないかとおっしゃる場合もあります。学校の中で先生によって対応が異なってしまうと子どもも混乱するので、保護者にもそのようにお伝えしています。私たちがやれる範囲でそのお子さんにとって困り感を少しでも少なくしたいという気持ちでやっています。

(當間委員)

学校で、対応していただけているということが聞いて安心しました。そういう子が救われるような仕組みや、保護者が頑張らないと分からないということがないような仕組みがあればいいなと思いました。

(森課長)

基本方針Ⅳの教職員の専門性の向上について、まずは学校現場の取組についてお話いただけますでしょうか。

(稲葉校長)

専門性の向上は、特別支援教育に限ったものではなくて、教育委員会が行っている研修や個人で学ぶ研修など教員は様々な場で学んでいますし、昔よりもそういった時間は多くなっていると感じています。

(関戸委員)

専門性の向上と同時に支援級の教員の継続性も大事だと思っています。教員もすぐに替わってしまうと、せっかく身に着けた知識だとか、スキルが引き継がれませんので、継続することも大事だと思っています。

それから、特別支援学校については、校内の授業研究がとても大事だと思っています。子どもにとって5年後、10年後にどうつながっていくのかということまで見据えてやっていくという長期的な視点に立つということも大事かなと感じています。

(笹森委員)

特別支援学校や特別支援学級の担当者になると、障害についてはたくさん学ぶ機会があります。そのため、子どもをまず障害の視点でとらえ、偏った見方をしてしまうことが

あります。土台になる子どもの発達が分かっている、そこに障害がどうかかわっているのかということが学んでいけるといいのかと思います。

(浅野委員)

「障害の状態が改善する」という表現にはひっかかる場所があります。障害は個性であるので、改善というよりも「通級指導教室で対応できるスキルが身に付いた」という方がよろしいのかと思いました。

(横山委員)

卒業をした後の受入ということをやっていますが、障害者の数が増えているということに関しては、10年くらい前から、受入れ先というところで実感しているところです。特に、医療の関係でいうと、医療的ケアを手厚く実施しているということですが、看護師が来ないという状況がございまして、非常に苦慮しているところです。肢体不自由の親御さんからは、医療的ケアのショートステイがなかなかやれるところがないと聞いています。

(池畑委員)

学校を卒業した後は厳しい状況だなと感じています。障害のある方が隣にいて当たり前という世界にはなっていません。川崎は人種も多様で、受け入れられやすいという特徴があってもまだまだだと思えます。関係はないのですが、教員の数を増やさないと、全てがそれにつながってしまっているような気がしています。

(森課長)

本日いただいた意見をもとに、今後の方向性について事務局で検討させていただきたいと考えています。

イ その他

<特になし>

(4) 次回について

(5) 閉会

以上